東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

視覚障害者のバスケットボールに関する調査研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-09-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鶴井,孝大, 小林,巌 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/149969

東京学芸大学教育実践研究支援センター紀要　第14集　pp. 169-174，2018

視覚障害者のバスケットボールに関する調査研究

鶴井　孝大*・小林　巌**

（2017年11月21日受理）

TSURUI, T. and KOBAYASHI, I.; Basketball Play by Persons with Visual Impairments (VI).　ISSN 1349-9580

This study examines basketball playing by persons with visual impairments (VI). First, using internet searches, literature describing previous and current circumstances of basketball playing by persons with VI was sought. Then a questionnaire-based survey was administered to players with VI to ascertain basketball's utility for them and difficulties hindering its wider acceptance among people with VI. Results showed a scarcity of research on this subject, indicating a need for additional investigations. Furthermore, questionnaire survey results revealed a few benefits of basketball play for VI players in addition to expected difficulties, especially related to safety during games and to sounds of goals. Discussion revealed future perspectives mainly related to rules and facilities based on player safety.

KEY WORDS : Sports, Basketball, Visual Impairments

* *Postgraduate Course in Special Needs Education, Faculty of Education, Tokyo Gakugei University*
** *Center for the Research and Support of Educational Practice, Tokyo Gakugei University*

1．はじめに

視覚障害者のスポーツ（以下，視障者スポーツと示す）のうち，球技として代表的なものにゴールボールや盲人卓球などがある（高橋，2004）。これらは，ボールを転がす，音源を使用するなど視覚障害者（以下，視障者と示す）への配慮がなされており，視覚障害特別支援学校での体育の授業やパラリンピックの競技種目としても取り入れられている。

一方，著者の一人は，視覚障害を有する友人たちとバスケットボール（以下，バスケと示す）を行う団体を立ち上げて活動している。この団体は，2014年３月より活動を開始し，現在は月に二度活動を行っている。プレーヤーについては2017年１月の時点で20人であり，他にボランティアやサポーターも活動に参加している。年齢構成については，プレーヤーの多くが20代の学生及び社会人であることが特徴である。またゲームの際には，アイマスクを着用した部員のみでもゲームが行えるよう，声出し，バウンドパスの導入や，ボールがゴールのリングに当たっても得点できる「リングヒットルール」など独自のルールを導入して取り組んでいるが，基本的には可能な限り健常者と同じ状況でバスケが行えるよう目指している。

バスケはボール投げやシュート方法が多彩であるなど，身体の動きが他の視障者スポーツとは異なる面があり，視障者に新しい動きの体験を提供できるといった点で意義あるものと筆者らは考えている。しかし，視障者にとって空中のボールを追うのが難しい（香田，2014）ことや，怪我などの心配があるからか，バスケは視障者に広く普及していない状況である。筆者らの把握している限

* 東京学芸大学教育学部特別支援教育特別専攻科
** 東京学芸大学教育実践研究支援センター　特別ニーズ教育支援部門

り，国内で前述の団体以外に視障者のバスケ（以下，視障者バスケと示す）に定期的に取り組んでいる団体はない。また，この団体の活動においても，ルール等が完全に整っていない状態であり，検討すべき課題が多く存在するといえる。

ところで，音の鳴るバスケットボールや，音源付きゴールなど，視障者バスケ向けの製品が存在することから，視障者バスケに関する取り組みが過去に行われていたと考えられるが，国立国会図書館，CiNii，および視障者対象の図書サービスであるサピエ図書館，日本点字図書館で障害者スポーツに関する文献を検索して内容を確認したものの，視障者バスケに関する記述は見つからなかった。また，製品の作成会社や視障者スポーツ団体などの関連団体に電話で問い合わせを行ってみたところ，約30年前に国内の盲学校でバスケの実践を行っていた例があったという情報は得られたが，それ以外に視障者バスケの過去の状況や，製品等の作成の経緯などに関する詳細な情報は得られなかった。

以上を踏まえ，本研究では，Web検索を行い，国内だけでなく海外も含めた視障者バスケに関する現在・過去の状況を確認することにした。また，視障者バスケの意義や，今後の普及に向けての課題を明らかにするため，現在実際にバスケに取り組んでいる視障者を対象にアンケート調査を行うこととした。

２．検討１（Web調査）

２．１　目的

検討１は，Web検索により，視障者バスケに関する過去および現在の現状について確認することを目的とした。

２．２　方法

Web調査では，GoogleおよびYouTubeを使用し，「視覚障害者　バスケ」および「blind basketball」を検索語とし，視障者バスケに関するコンテンツを確認した。

検索期間は2016年５月～2017年１月である。

２．３　結果

日本語の検索では，50件中視障者バスケに関するコンテンツが５件確認された。４件が音の鳴るボールやゴールなどの製品の情報であり，１件が視障者バスケのルールを紹介するものであった。このコンテンツ（細川，1996）から，少なくとも1990年代以前には視障者バスケが模索されていたことがわかる。ただし，このコンテンツの説明によれば，ボールは鈴入りの物を使用することとされていたり，弱視者には一般のルールが適用されるが，全盲者が参加する場合はシュートのみをおこなうなどの区別・修正が行われるといったように，独特の競技ルールが定められていたようである。

英語の検索では，ICEVI（国際視覚障害者教育協議会）の2002年国際会議論文集の中に，『Adapted Basketball for the Blind』というタイトルでイランの教育関係者が教育実践の発表を行っていることを確認した（Jadidi, B., et al., 2002）。この論文の中で紹介されているルールは，全盲と弱視を組み合わせてプレーしたり，ゴールから音を鳴らすなど，前述の細川（1996）の内容と類似していた。この他には米国のコンテンツが確認された。まず，Treak（出版年不明）の『Blind Basketball - Basketball』によれば，アメリカにおいても視障者バスケが模索されており，ゴールから音を鳴らす・ボールに音源を入れるといった工夫がなされているようである。

また，2000年代にジョンズホプキンズ大学において，ゴールの後ろとボールに音源を取り付けて視障者バスケに関する実験的研究が行われていた（Conn, 2006）。この研究によれば，ゴールからの音は低く，ボールの音は高くなっており，異なる音源を使用したという。ボールについては，この他にも，Braille Superstore（出版年不明）のホームページ『Bell Basketball for the Blind』から，内部に音源を入れたバスケットボールが製造販売されていることが確認された。

YouTubeの検索では，100件中20件ほどが視障者バスケに関連していたが，視障者のシュートやドリブルなど単一動作のみの動画であった。これらは全て海外のコンテンツであった。

２．４　考察

国内において視障者バスケが過去に検討されていたという事実はあったものの，ルールが通常のバスケットボールと大きく異なっていたことが伺われた。当時より，視障者にとってバスケが難しいスポーツであると認識され，その結果として大幅なルール変更がなされたものと思われる。

一方，海外のコンテンツに目を向けた場合，国内と同様に弱視者と全盲者がともにプレーしたり，音源を設置するといったルールの変更・工夫を加えながら，視障者でもできるバスケを模索していることを確認できた。特に米国のコンテンツが目立っているようであった。

しかし，これらの海外の状況においても，視障者バスケのルールやプレーの環境などが未だ整っていないことが推察され，このような点を検討することが普及において重要であると考えられる。

また，結果的に，視障者のバスケに関する詳しい歴史

や起源については明確でなく，今後も調査を継続して進めていく必要があるだろう。

３．検討２（アンケート調査）

３．１　目的

本調査は，実際にバスケを行っている視障者に対してアンケート（またはインタビュー）を実施することで，現在の視障者バスケの状況や，今後の普及に向けての課題を整理し明らかにすることを目的とした。

３．２　方法

(1) 対象

調査は実際にバスケを行っている団体（前述）に所属する視障者20人（全盲13人，弱視７人，男女の人数はともに10名）を対象とした。

（2）調査内容

回答者の年齢・性別（２問），視障者バスケに取り組むようになった動機（２問），視障者バスケの長所や魅力について（８問），視障者バスケの課題（８問），その他の意見（１問）の計21問から構成される調査用紙を作成した。回答は選択式と記述式の併用である。

（3）手続き

研究の趣旨説明文，調査用紙，および返信用封筒の三点を対象者に送付し，回答を依頼した。

回答は郵送及び電子メールによる返信，または個別に構造化インタビューの形式による回答のいずれかとした。

（4）調査期間

2016年11月～2017年１月

（5）分析

回答を項目ごとにWordに入力し，内容ごとに整理した。

（6）倫理的配慮

調査の趣旨説明文において，調査で得られた情報は研究目的以外で使用しないこと，また個人が特定されないように配慮することを説明した。調査用紙の回収（インタビュー形式の回答の場合は，回答への協力の申し出）をもって調査への同意が得られたものとした。個人情報の取り扱いに十分留意し，倫理的配慮を行った。

３．３　結果

(1) 回答率

20名中７名が回答した（回答率35%）。２名が電子メールによる回答，５名がインタビュー形式での回答であった。

(2) 回答者の状況（問１）

年齢は24歳以下が４名，25歳以上が３名であった。また女性が３名，男性が４名であった。

(3) 視障者バスケに取り組むようになった動機（問2）

a）バスケをやりたいと思ったきっかけ

「知り合い・友人に誘われたから」が３名，「楽しそうだと思ったから」「興味がでたから」「視覚障害者がどのようにバスケをするか気になったから」が２名ずつであった。

b）活動に参加する以前からバスケをやりたいという気持ちはあったか

「あった」が5名，「どちらかといえばなかった」が２名であった。

c)「どちらかといえばなかった」，「なかった」と答えた場合の理由

「健常者とは視力差があり打ち込めなかった」「目がみえないとボールを追うのが難しいと感じていた」という回答があった。

(4) 視障者バスケの長所や魅力（問3）

a）他の視障者スポーツとの違い

「クラブ独自でルールを作れる」が４名，「空中にゴールがある」「シュートやパスを投げる」がともに３名，「コートを動き回れる」が２名であった。

b）バスケにおける一番の魅力・楽しいこと

「パスによる連携」「シュート成功時の快感」についてそれぞれ３名ずつ回答が得られた。

c）パスの魅力や意義

「仲間と連携できて楽しい」が４名と多く，「味方のシュートチャンスを増やせる」（２名），「体力のロスが少ない」（１名）の回答もあった。

d）ドリブルの魅力や意義

「パスやシュートの基盤になる」（２名）の他は，「音がする」「確実に進める」「新しい感覚」という回答が１名ずつであった。

e）シュートの魅力や意義

「得点が入るから重要」（４名），「種類が多く試したくなる」（３名）という回答が多かった。また，理由は様々だが「気持ちいい」「うれしい」と５名が回答した。

f）ディフェンスの魅力や意義

「試合の流れを変えられる」（３名）が多かった。

g）最も意識している役割

守備に関する回答が３名で最も多かった。

h）普及の際最もアピールしたい部分

５名から「視覚障害者でもバスケができる」という回答が得られた。

(5) 視障者バスケの課題（問４）

a）普及が進まなかった理由

「安全」と「空中のボール」に関する回答がそれぞれ

４名から得られた。特に「接触に関する反則の設定が難しい」「空中のボールの音が聞こえにくい」という記述が２名ずつからあった。

b）普及におけるルール面の課題

「接触に関するファウル」（５名）など，安全面の内容が多かった。

c）普及におけるプレー面での課題

「３対３が限界」「ファウルの確定が必要」が２名ずつ，またボールへの恐怖心に関する回答（１名）が寄せられた。

d）普及における設備面の課題

回答のほとんどが，ゴール音源に関する指摘であった。

e）より多くの視覚障害者を選手にする方法

「ネットによる宣伝」（３名），「活動場所の拡大」（２名），「ルールを整えてから普及すべき」（２名）が多かった。

f）改善が必要な一番の課題

「防具の着用」「ルールの整備」「５対５でのゲーム」について（それぞれ１名）などの安全面に関する回答が多かった。

g）視覚障害者にバスケを身近にする方法

「視覚障害特別支援学校への導入」（３名）が多く，所属団体の活動の拡大に関する指摘もあった。

h）視障者バスケを世間一般に広める方法

「SNSやブログでの発信」（４名），「チラシ配り」（２名）などの回答が得られた。

(6) その他の自由意見（問５）

「得点の難易度を下げて体験者を引き寄せる」（１名），「いつ目をみえなくしたかで動きに差が生じる」（１名）という回答があった。

３．４　考察

このアンケート調査から，現在行われている視障者バスケの状況や課題について整理してみたい。

まず，視障者バスケと他の視障者スポーツとの違いについて，「ゴールが浮いていたりボールを投げるなど，空中に関するプレーがある」，「コート内を自由に動き回れる」，「新しいスポーツであるため自分たちでルールを調節・設定できる」といった回答が多くの部員から寄せられた。空中に関するプレーや自由にコート内を動き回れるというのはおそらく，フロアバレーボールやゴールボールなどと比較しての回答であると思われる。これらのスポーツではボールが床から浮くことはなく，プレーヤーも横向きの動きを基本に行動しているためである。視障者スポーツの中には，ブラインドテニスやブラインドサッカーのように，コート内を激しく縦横に動き回るスポーツが存在する。しかしバスケは，ゴールが空中にあるため，シュートを行うためにはボールを投げなければならず，また誰でも手を使ったプレーができるので，前述のようなスポーツよりも複雑な動作が必要といえる。このような点は，視障者バスケの他にない特徴と言えるであろう。このような特徴は，今まで体験できなかった動きや感覚を視障者に提供し，今後の視障者スポーツの枠組を変える可能性が伺われるため重要と考える。

その一方で，やはり視障者バスケを普及させるためには様々な課題があることも推察された。特に注目すべきこととしては，安全面とゴールの音源にあるといえる。

安全面については，接触や衝突によるファウルの設定が難しいこと，ボールが顔面などにぶつかると障害の悪化につながる可能性があること，５対５でのゲームはお互いの位置を把握できず怪我が増加する恐れのあることが挙げられる。特にファウルについては，ルールを整えることで安全性の確保につながるため多くの回答者が気にしており，その重要性が伺われる。したがって，安全性を確保するためにはファウルに関する決まりを整える必要があり，逆にこれが不徹底だと普及に影響が生じると認識されていることが推察された。

また，プレーヤーの人数についても安全性やより自由にプレーする意味で重要な事項といえる。通常のバスケは５対５であるが，近年は通常のバスケのルールを一部変更した３対３のバスケが普及してきており（株式会社スポーツワン，2001），2020年の東京オリンピックでも３人制バスケが新種目として採用されることになった（JBA３×３公式サイト，2017）。このルールを一部取り入れることも検討する必要があるかもしれない。

一方，ゴールに使用する音源については，視障者バスケを行う上で重要な事項であり，多くの回答者が回答の中で指摘している。音源が安定することにより，ゴールやコート内における方向感覚をある程度補助することができ，シュートの制度を向上させることになる。そのことを踏まえると，多くの視障者にとって気軽に，またより安定した状態でバスケを行うためには，一定の規格による音源つきゴールの存在は不可欠ということになる。シュートがうまく入れられることは普及する上で重要であるという回答も得られていることから，やはり音源の整備は極めて大きな意味があるといえる。

より多くの人が視障者バスケに関わるような状況になるには，以上のような，ルールの検討や音源の整備を進めたうえで，インターネット等での宣伝を行うことが必要である。また，視覚障害特別支援学校での宣伝を含め，様々な人々に視障者バスケを体験してもらうためには，ミニバスケットボールで使用されているような柔らかく軽いボールを使っての恐怖心及び怪我の緩和や，ルールを簡単にしたアトラクション要素の追加といった方法も

考えられるのかもしれない。

4．総合考察

本論文は，視障者バスケの歴史や現状を踏まえることによって，今後どのようにすれば視障者バスケを広めていけるのかを考察することを目的とした。

まず検討１では，視障者バスケの現状及び歴史について調べるために，Web調査を行った。その結果，過去に国内で視障者バスケが模索されていたことや，海外でも米国およびイランにおいてルールの変更や音源の導入を行いながら視障者バスケの取り組みが行われていたことを確認できた。しかし，こうした取り組みに反して，視障者バスケが充分に普及しているとはいえないことも同時に再確認することとなった。

次に，検討２において，視障者バスケの魅力や普及上での課題等について，実際にプレーヤーとして取り組んでいる７人の視障者を対象にアンケート（インタビュー）により調査をおこなった。その結果，バスケはコート内を自由に動き回る，空中へのシュートが難しくまたいろいろな方法があるなど他の障害者スポーツと大きく異なる魅力を持っている一方で，プレーヤー同士の接触やボールの衝突といった安全面に大きな課題があり，それが視障者への普及の点で難しさをもたらしていることが推察された。

以上を踏まえ，視障者バスケを普及させるためには，こうしたバスケの特徴及び安全面での課題をうまく適応させることが重要といえる。ゴールに音源を設置したり足で認識できるラインを張るといった工夫はもちろんだが，むしろファウルに代表される接触・衝突に関する決まりを整備したり，声出しや防具に関する意見を整えなければ普及に踏み込むのが難しいという意見が多くの回答者から指摘された。したがって，ルールを整えた上で，インターネットでの宣伝活動などを行っていく必要があろう。今後はこうした安全に関する課題やルールに焦点を当てた研究の遂行が望まれる。

なお，今回の検討２については，20人中７人からの回答しか得ることができず，情報源としてはやや頼りないといわざるをえない。より多くの回答が得られるように調査方法を工夫する必要があると考えられる。今回のアンケート調査はバスケの魅力や課題について確認するものであったが，インタビュー調査の際に，しばしば「人の気持ちが入るものだからメールなど文字で伝えるのは難しい。そのためこのように直接話をした方がお互いにとってよい資料になるのではないか」という意見が回答者から寄せられた。今後の調査の際にこのような意見も反映させていきたい。

また調査結果についていえば，海外に関する情報は最低限のものしか得ることができなかった。日本との比較はもちろんとして，海外の様子を取り入れることは研究する上でも，またバスケに取り組む活動自体においても参考になる情報であるため，今後もより広い視点から視障者バスケの状況を考察していきたい。

5．結論

本研究では，視障者バスケの過去・現在の状況に関するWeb調査を実施するとともに，視障者バスケの意義や，今後の普及に向けての課題について，実際に取り組んでいる視障者を対象としてアンケート調査を実施した。その結果，Web調査では過去に視障者バスケの取り組みが少なからず行われてきたことを確認したが，情報が少なく今後も調査を継続する必要がある。また，アンケート調査から，視障者バスケに多くの魅力があることは確認されたが，一方で安全面や音源の問題も確認された。今後はこれらを踏まえたルールや設備に関する検討を進めていくことが課題である。

付記

本稿は，筆頭著者の2016年度東京学芸大学教育学部特別支援教育特別専攻科修了論文を整理し直したものである。

本研究の執筆にあたり，調査にご協力いただいた関係者の皆様に感謝申し上げます。

文献

１）Braille Superstore （出版年不明） Bell Basketball for the Blind. http://www.braillebookstore.com/Bell-Basketball.1&ei=vY70tG9m&lc=ja-JP&s=1&m=472&host=www.google.co.jp&f=1&client=ms-docomo_link-jp&gl=jp&q=blind+basketball&ts=1485617625&sig=AF9NednuUTazMFtvxIZ5rJvoqk_BIEVXMA 2017年１月28日閲覧

２）Conn, A. F.（2006）Basketball for the blind – a key step in developing navigational skills. Journal of Rehabilitation Research & Development, 43（2）, xi-xiii.

３）細川健一（1996）視覚障害者とスポーツ. http://www.cis.twcu.ac.jp/~k-oda/VIRN/basics/Sport.htm 2017年１月26日閲覧

４）Jadidi, B and Shahi, Z（2002）Adapted Basketball for

the Blind. Proceedings of the 2002 ICEVI Conference. http://icevi.org/publications/ICEVI-WC2002/papers/01-topic/01-bahram-jadidi.htm 2017年1月26日閲覧

5）JBA 3×3公式サイト（2017）トピックス　3x3が五輪正式種目に決定！！. http://3x3.japanbasketball.jp/topics/975　2017年6月9日閲覧

6）株式会社スポーツワン（2001）3on 3バスケットボールのルール. http://googleweblight.com/?lite_url=http://www.sportsone.jp/basketball/rule/3on3.html&ei=4BRy6xRf&lc=ja-JP&s=1&m=962&host=www.google.co.jp&f=1&client=ms-docomo_link-jp&gl=jp&q=3%E5%AF%BE3%E3%83%90%E3%82%B9%E3%82%B1&ts=1485373112&sig=AF9NedltSd3BAdDp6M_by0H 2017年1月26日閲覧

7）香田泰子（2014）視覚障害者のスポーツにおける指導と支援. バイオメカニズム学会誌, 38（2）, 117−122

8）高橋明（2004）障害者とスポーツ. 岩波書店

9）Traek （出版年不明）） Blind Basketball – Basketball. http://basketballtarek.weebly.com/blind-basketball.html&ei=Gm_Lwap6&lc=ja-JP&s=1&m=305&host=www.google.co.jp&f=1&client=ms-docomo_link-jp&gl=jp&q=blind+basketball&ts=1485617290&sig=AF9NedlekkeCRhzjO3ypVq2bzwF8bhqKsg 2017年1月28日閲覧